

ゲーテ研究

イデーと象徴

友田孝興

一	序·····	一
二	美と真·····	二
三	内的真理感情·····	三
四	主観と客観·····	四
五	自然認識·····	五
六	根源現象·····	六
七	普遍と特殊·····	七

自然には多くの姿あれど

ただ一つの神を啓示するごとく

芸術の広野には

永遠なる一つの意味はたらく。

そは真理の意味にて、

ただ美でもってのみ身を飾り

晴れた真昼の明るさの極みを

心安らかに眺めやるなり。

Wie Natur im Vielgebilde

Einen Gott nur offenbart,

So im weiten Kunstgefilde

Webt ein Sinn der ew'gen Art;

Dieses ist der Sinn der Wahrheit,

Der sich nur mit Schönerem schmückt

Und getrost der höchsten Klarheit

Hellsten Tags entgegenblickt.

## 一 序

芸術と科学、これは丁度、呼吸と吸気、心臓の収縮と拡張といった交互作用と同様に、ゲーテにあっては、彼の生命活動の脈搏として、常に絶えることのない永遠の相補的連関運動を繰り返しながら、生きた実り豊かな真理の把握へと昂進している。つまりこの両者は、彼の自然に対する予感に富んだ神聖なる驚嘆によって自己の生命を得、彼の愛に充ちた深遠なる真理感情の内に、不可分の有機的生命連関をなして、自己の生産性を相互に促進し合っている。

ゲーテの真理感情は、世界と精神との綜合であり、内的なるものから発して外的なるものに接触しつつ発展するところの「内的真理感情」(das innere Wahrheitsgefühl)<sup>①</sup>であるが、その真理感情が要請するところのものは、単なる抽象的概念ではなく、それらを包摂し、それらを超えるところの真理の動的全体である。真理を愛する者の使命は、一切の現象を固定的静的要素に還元することにあるのではなく、自然が人間の内に置いたところの一切のものを外界の映像に対応させることによって、自然と人間との生きた統一ある「実り豊かな認識」(fruchtbarer Erkenntnis)<sup>②</sup>を得ることにある。この「実り豊かな認識」を得るために、彼の「内的真理感情」は、丁度、知覚心理学が両眼においてこそ空間の三次元的な奥行き認知が明確に可能となることを我々に教えたように、芸術と科学との有機的結合においてこそ、真理の深奥に触れる契機が与えられるのだということを、彼自身に教えるのである。芸術というものは、いまだ科学が明晰化していない概念・法則を、実践において先取しているところの「実践的な科学」(praktische Wissenschaft)<sup>③</sup>である。従って科学というものは、悟性のみを認識の担い手とすることから来る生命のない概念的抽象化による現実の貧困化にいつまでも停留することなく、常に芸術的・創造的慧眼によって、自己の抽象的・分析的



概念に、生命と温かさを持った総合的全体性を付与して行かなければならない。科学と芸術との結合による自然と人間との生きた統一ある「実り豊かな認識」の獲得、これがゲーテの希求するところのものなのである。我々はこれらの論述において、真と美との問題を明らかにしつつ、ゲーテの自然認識法を究明し、彼の目指すこの人間との深い連関を持った「実り豊かな認識」とはいかなるものであるのか、そしてこの「実り豊かな認識」において見出されたものが、ゲーテ美学のなかで、どのような機能を果しているのか、ということを考察するものである。

## 二 美と真

まず真と美との問題から考察を進めてみよう。ゲーテにとっては、「真なるものは、神的なるものと同一であって、決して直接には認識され得ない」(Das Wahre, mit dem Göttlichen identisch, läßt sich niemals von uns direkt erkennen).<sup>①</sup>つまり、「真なるものは神に似ている。それは直接には現象しない。我々はそれをその顕現から推知しなければならぬ」(Das Wahre ist göttlich: es erscheint nicht unmittelbar, wir müssen es aus seinen Manifestationen erraten).<sup>②</sup>これがゲーテの「真なるもの」に対する見解である。ここついで「真なるもの」とは、静的要素に還元することのできない、宇宙の根源力・生ける法則としての「イデー」(Idee)のことを指すのであるが、この「天も地もこれに懸って存する一切の生命の源泉」(Quellen alles Lebens,/ An denen Himmel und Erde hängt)<sup>③</sup>としての真・イデーは、直接には認識され得ない。つまり、自然の構成体の本質としてのイデーは、直接には経験の場において現象することはない。しかし、イデーは必ず象徴を通して自己を啓示する。なぜなら内容は形式なしには存在することができないからである。(イデーと象徴の関係は後に詳述する)

自然觀察においては

一と全とに留意しなければならぬ。

自然には内もなければ外もない、

内がそのまま外なのだ。

絶えず怠ることなく

この聖なる開かれた神秘を把握せよ。

Misset im Naturbetrachten

Immer eins wie alles achten;

Nichts ist drinnen, nichts ist draußen:

Denn was innen, das ist außen.

So ergreift ohne Säumnis

Heilig öffentlich Geheimnis.

この真実の仮象を、

この真剣な遊戯を享受せよ。

生けるものは一つの一にあらず、

それは恒に一つの多である。

Freuet euch des wahren Scheins,

Euch des ersten Spieles:

Kein Lebendiges ist ein Eins,

Immer ist's ein Vieles.<sup>④</sup>

自然の現象形態というものは、仮象ではあるが、それは「真実の仮象」であり、イデーの象徴的表現に外ならない。

イデーと経験とは、諸制約によって、完全には「合致する」(kongruieren)ことではないが、しかし「類似的」(analog)であることは認めなければならぬ。なぜならイデーは常に「見知らぬ客人として」(als ein fremder Gast)<sup>⑤</sup>現象界にはいり込み、「真剣な遊戯」をなしつつ、公然の秘密としての自己を象徴的に表現しているからである。従って我

々はこの象徴を積み取る眼を持ちさえすれば、イデーと経験の間の分裂を救うことが可能となる。つまり、世界のイデーの分有にあずかっている人間が、自己のイデーと世界のイデーとを相互に調和的に共鳴させさえすればよい。この共鳴に力を与えるのが芸術である。ゲーテにとってはイデーの「真の媒介者は芸術である」(Die wahre Vermittlerin ist die Kunst).<sup>⑦</sup> 芸術的・創造的慧眼の捉える美こそは、自然の根底を貫流するところの真・イデーの象徴的顯現であり、世界内容の啓示に外ならない。

美は秘められた自然法則の顯現であって、それらの法則は美の現象がなければ永遠に隠されたままであろう。

Das Schöne ist eine Manifestation geheimer Naturgesetze, die uns ohne dessen Erscheinung ewig wären verborgen geblieben.<sup>⑧</sup>

つまり彼にあっては、美は単なる主観の側にのみ存在するといったものではなく、美は自然の形成的・根源的法則力の支配を受けている。「美のためには現象するところの法則が必要である」(Zum Schönen wird erfordert ein Gesetz, das in die Erscheinung tritt).<sup>⑨</sup> 言い換えれば、「最大の自由において、しかも自己独自の制約に従って現象するところの法則が客観美を産み出す」(Das Gesetz, das in die Erscheinung tritt, in der größten Freiheit, nach seinen eigensten Bedingungen, bringt das objektiv Schöne hervor).<sup>⑩</sup> のである。「主観内の未知の法則に対応するものが客観内のある未知の法則である」(Es ist etwas unbekanntes Gesetzliches im Objekt, welches dem unbekannten Gesetzlichen im Subjekt entspricht).<sup>⑪</sup> が故に、美は単に主観の受動的情調としてのみ存在するといったもの

のではなく、客観的な真理世界への適応性を所有しているわけである。

要するに、美の現象ということは、自然の本質をなすところのイデーという根源的形成力の生産的行為であると同時に、それは主観の側から言えば、自然のイデーの分有にあずかっている主観の創造的・生産的精神が、自然と交感しつつ、自己の内に自己の美を形成し、その美の対応像を自然のなかにおいて見出しているのだとすることができ。しかし、たとえ美を構成するものが主観であっても、主観の内なる美的創造力こそは、自然の内なる根源的形成力と同一のものである。しかも、美を感受する、つまり美を創造するということは、素材から形象の動的生命を抜き出すところの美的創造力が、我々の全存在を最高の集中へと導くことによって初めて可能となるものであるが故に、真理探究に際しては、この芸術的・美的創造力が不可欠の役割を果すのであり、またこの創造力によって生み出された美こそ、我々の全存在の最高集中裡における生きた結晶なるが故に、真理の普遍性と無限の象徴的意味を担うことになる。ゲーテのなかには、シャフツベリー(Shafesbury)の「すべての美は真である」(Jede Schönheit ist Wahrheit)と、教えが、常に基線として生きている<sup>⑩</sup>。また真理は「美でもってのみ身を飾る」が故に、「すべての真は美である」(Jede Wahrheit ist Schönheit)という真と美の入れ換えも、ゲーテにおいては本来的である。「たとえ美しくないものがあったも、それを美しく見るほどの想像力を我々は持たなければならぬ」(Wenn etwas auch nicht schön ist, so müssen wir doch so viel Phantasie haben, um es schön zu finden.)<sup>⑪</sup>というのが、彼の主張するところである。彼にとつては、美と真との緊密な統一的關係を承認し、自己の全存在を挙げて事物を美の内に把握するというところこそ、事物の全体的連関性を見ることが出来る最大の契機であり、事物の最も深い真・イデーを理解することのできる根本契機なのである。つまり、「すべての芸術は全人を要求する」(Jede Kunst verlangt den ganzen Menschen.)<sup>⑫</sup>の

であり、我々の全エネルギーを強化する働きを持っている。従って芸術こそは、ゲーテにとっては、宇宙の富と深さとを発見する際の重要な鍵なのである。科学は理性で、芸術は感性で、という図式ほど彼にとって愚かしいものはない。感性的なるものの中には理性的なるものが流れているのであり、感性の豊かさこそ、理性的に最高なるものの体得される根本要素である。美が感性の支配を多大に受けているからといって、そくそれが客観的認識の阻害要素を意味するものではない。「感覚は欺かない、欺くのは判断である」(Die Sinne trügen nicht, das Urteil trügt.)<sup>④</sup>のような理由から、ゲーテは科学と芸術との協同において、「理性批判」(Kritik der Vernunft)と「感覚批判」(Kritik der Sinne)との綜合において、自然と人間との間の生きた真理を把握しようとするのである。

### 三 内的真理感情

ゲーテにとっては、真理は「美でもってのみ身を飾る」が故に、美的慧眼こそは真理探究の錫杖であったわけであるが、更に論を進めれば、その美的創造力によって構成された美が、美として承認される場合は感情である。従って、感情こそが真理の源泉であると言うことができる。ゲーテは、「深い感情は、それが純粹で自然な場合には、最善で最高の対象と一致し、そしてそれらの対象を常に象徴的にするであろう」(tiefes Gefühl, das wenn es rein und natürlich ist, mit den besten und höchsten Gegenständen koinzidieren und sie allenfalls symbolisch machen wird.)<sup>①</sup>と言う。つまり、美が承認を受けることの深い自然な純粹感情こそは、最大のものと最小のものとを、普遍と特殊とを相等しく抱擁し、客観相互、及び主観と客観との「美しい分離されない全体」(ein schönes ungetrenntes Ganze)<sup>②</sup>を要請することによって、絶えず知性による断片的概念に生命を与え、それらを人間との連関において統一して行く

働きを持つのであり、また固化した先入見を打ち破り、「最善で最高の対象」と、つまりは真・イデーと一致することによって、永遠なる「真理の意味」を象徴的に開示する役割を果すのである。

一般に感情という言葉は、理性を喪失した妄情・迷情の意味で使用されることが多いが、しかし感情の真の本質はそのような低次元にあるのではない。豊かな純粹感情こそは、真理という種子を開花結実させるための土壌であり、真実相を映出する源泉である。ゲーテは、人間の到達し得る最高のものは「驚嘆」(Verwunderung)である、<sup>⑧</sup> と言うが、このことは、驚嘆がなければ固定観念から自己を解放することも、対象に対して絶えず新たな形式で感応することも不可能である、ということの表明に外ならない。驚嘆とは偶然性に対する直観感情であり、いまだ悟性によって概念化されていない特殊が、固化した普通の安逸を打ち破り、自己の正当なる権利を主張するときの叫びである。しかも彼にとっては、「偶然」(Zufall)とは「そこにおいて直接自己の全能をもって登場し、最も些細なものによって自己の栄光を示すところの神」(Gott, der hier unmittelbar mit seiner Allmacht eintritt und sich durch das Geringfügigste verherrlicht)<sup>⑨</sup> である。従って、偶然を驚嘆の念でもって直観するということは、とりもなおさず神的生命を感ずることであり、神的生命を感ずるということはそれが偶然に対する驚嘆の直観的純粹感情であるが故に、狹隘な断片的固定概念を打ち破り、思考を促進することによって新たな動的真理世界を切り拓き、生きた統一ある「根本真理」(Grundwahrheit)<sup>⑩</sup> に触れる契機を与えるということになる。従って、ゲーテにおいては、真理は神性に対する信仰感情を離れてはあり得ない。「信仰とは不可視なものへの愛であり、不可能なもの、あり得ないようなものへの信頼である」(Glaube ist Liebe zum Unsichtbaren, Vertrauen aufs Unmögliche, Unwahrscheinliche)<sup>⑪</sup>。しかし彼の神性に対する信仰は、単なる幻想的な妄念としての無根の信ではなく、恒に現実世界に対する深

い洞察と「真の感動」(die wahre Rührung)<sup>⑦</sup>とから生まれた信仰であるが故に、そしてまたそれは、宗教的な愛の純粹感情によって、分離した個別存在を「普遍的生命」(das allgemeine Leben)<sup>⑧</sup>のなかへと移入する働きを有するが故に、真理探究にとっては欠くことのできない生産力となる。「すべての考察」(alle und jede Betrachtung)は「信仰によって初めて補完される」(erst durch den Glauben ihre vollständige Ergänzung erhalten)のであらう。「万象の根源である唯一者を觀照し尊敬するようになればなるほど」(je mehr wir das Eine, wo alles herkommt, schauen und verehren lernen)、ゲーテにとっては自然の「多様性」(Mannigfaltigkeit)を「正しく把握し理解する」(recht fassen und begreifen)ことが可能となる。親鸞は『教行信証』の「信巻」において、「信は即ちこれ真なり・実なり・誠なり・満なり・極なり・成なり・用なり・重なり・審なり・驗なり・宣なり・忠なり」という名言を表白しているが、まさにゲーテにあっても、信においてこそ真実は至誠円満し窮極完成するのであって、真を詳審に宣明驗証するものこそは神性を重用する忠なる信の純粹感情でなければならぬ。それ故に、彼は「ファウスト」をして「感情がすべてだ」(Gefühl ist alles)<sup>⑩</sup>と言わしめるのである。しかし大切なことは、

無限なるもののなかへ歩み入ろうと欲するならば、

ただ有限なるもののなかをあらゆる方面に向って進み行け。

Willst du ins Unendliche schreiben,

Geh nur im Endlichen nach allen Seiten.<sup>⑪</sup>

という言葉でも明白なように、現実世界から乖離したような宗教感情によって、ゲーテが真理世界へ参入しようとするのではないということである。宗教的な統一の敬虔感情に浸ることを彼は窮極目標とするものではない。「汝の生は行のまた行、」(Sei dein Leben Tat um Tat)である。現実に対する「苦しき勤めの日々の持続」(Schwerer Dienste tägliche Bewahrung)という無倦の行のなから、美を通すことによって必然的に生まれて来る信をゲーテは尊ぶのであって、行なくしては信の意味はない。これは真理を愛する者の当然の帰結である。行信の相映こそは真理を愛する者の生そのものであって、ここにおいてこそ「外的なるものの直観を通して、最も内的なるものへの洞察に達す」(durch Anschauung des Äußeren zur Einsicht in das Innerste gelangen)ことが可能となる。ゲーテにあっては、つまるところ、自然研究や芸術創造の行の深化が絶対者への信を呼び、また名状し難き至高なるものへの信の深化が論理的・美的真理探究の行を促進する。真理の生動性を重視する彼にあっては、「生が生を創造する」(Leben schaffe Leben)のであって、生そのものであるところの行信の相映においてこそ、真理は生命を得ることができるのである。従って、感情の内に現われる根源的な存在統一を計算知によって破壊し、自然の生命を殺すような論理的抽象化は、おおよそゲーテの内に宿る科学的志向とはほど遠い存在であるということは言を俟たない。「知は区別することのできるものを知ること、学は区別することのできないものを承認することにある」(Wissen beruht auf der Kenntnis des zu Unterscheidenden, die Wissenschaft auf der Anerkennung des nicht zu Unterscheidenden.)<sup>⑨</sup>という言葉からも明かなように、区別することのできるものを知ることとは、科学にとって欠くことのできない現実的操作ではあるが、しかしそれは単なる知識にすぎない。科学が真に学問の名に値するような創造的認識を獲得するためには、区別することのできないものを、つまりは「イデーを現象の内に承認する」(die Idee in der Erschei-



nung anerkennen<sup>⑮</sup>) が必要となる。芸術によって媒介されたこの神(真)的生命・イデーを承認する器官が「内的真理感情」であって、これによって、「絶対者」(das Absolute)を現象の内に承認し、それを常に眼中に保持する者は多大の利益を得るのだと彼は確信する<sup>⑯</sup>。この彼の確信は、科学の否定を惹起するというよりは、むしろ科学を真に生きた学問たらしめるための確信と言わなければならない。

我々がより高次の意味において発明・発見と名付けるところの一切のものは、独創的な真理感情の大きいなる発動であり実証である。この真理感情が、密かにとつくの昔から涵養されていて、ふと思いがけなく稲妻のように閃くと、実り豊かな認識になる。このような発明・発見は、人間に彼が神に似ていることを予感させるところの、内的なるものから発して外的なるものに接触しつつ発展する一つの啓示であり、またそれは、現存在の永遠の調和について至幸なる保証を与えるところの、世界と精神の綜合である。

Alles, was wir Erfinden, Entdecken im höheren Sinne nennen, ist die bedeutende Ausübung, Betätigung eines originalen Wahrheitsgefühles, das, im stillen längst ausgebildet, unversehens mit Blitzesschnelle zu einer fruchtbaren Erkenntnis führt. Es ist eine aus dem Innern am Äußern sich entwickelnde Offenbarung, die den Menschen seine Gottähnlichkeit vorahnen läßt. Es ist eine Synthese von Welt und Geist, welche von der ewigen Harmonie des Daseins die seligste Versicherung gibt.<sup>⑰</sup>

ここに示されているように、「実り豊かな認識」を生む母胎こそは、芸術によって涵養された神性を承認する「真理

感情」に外ならない。なぜなら、神というものは窮極的な全体的理想的統一のイデーであって、このイデーの承認によってこそ、悟性の独裁が打ち破られ、個別的経験内容が普遍的大生命のなかへと統一されていくことが可能となるからである。「真理感情」のなかで、諸部分が「一つの永遠なる全体」(ein ewiges Ganze)<sup>⑩</sup>へと融合されるとき、そこに見出される認識こそは、「現存在の永遠の調和について至幸なる保証を与えるところの、世界と精神の総合」となる。

要するに、ゲーテの目指すものは真理の「実り豊かさ」である。この実り豊かさは、世界と精神、客観と主観との総合を必要とする。「精神と世界との美を直観するところ」(die Schönheit des Geistes und der Welt anzuschauen)<sup>⑪</sup>つまり、主観と客観との間の「美しい関係」(schönes Verhältnis)<sup>⑫</sup>を見出すことが必要なのである。ゲーテにとっては、「物と物との関係はすべて真である」(Alle Verhältnisse der Dinge wahr)<sup>⑬</sup>のべあつて、この「物に対する自己の関係を見出すことができない」(sein Verhältnis zu den Dingen nicht finden können)<sup>⑭</sup>限り、真理は単なる静的概念に過ぎない。

私は自己自身と外界との関係を知るならば、私はそれを真理と言う。こうして各人は自己自身の真理を持つことができる。そしてそれは常に同一の真理である。

Kenne ich mein Verhältnis zu mir selbst und zur Außenwelt, so heißt ich's Wahrheit. Und so kann jeder seine eigene Wahrheit haben, und es ist doch immer dieselbige.<sup>⑮</sup>

自己自身と外界との「美しい関係」を知ることが大事であって、ここに見出されたものこそは、ゲーテにとっては、「一つの決定的な生」(ein entschiedenes Leben)<sup>⑧</sup> そのものなのである。そして「イデーの美としての顕現」(die Manifestation der Idee als des Schönen)<sup>⑨</sup> つまり、真・イデーが美として顕現するが故に、「美を感得する眼」(für das Schöne empfängliches Auge)<sup>⑩</sup> を持つものであれば、自己自身と外界との「美しい関係」は、どの人にとっても同一の真理たり得ることができるとなる。なぜなら、第二章で述べたように、美というものが客観的な真理世界への適応性を保持しているからである。このように、客観相互、及び主観と客観との間の「美しい関係」こそが、実り豊かであり真なるが故に、その帰結として、

実り豊かなもののみが真である。

Was fruchtbar ist, allein ist wahr.<sup>⑪</sup>

とゲーテは表明するわけである。

愛(Liebe)は促進する(fördern)ものであり、憎しみ(Haß)は妨害する(hindern)ものである。<sup>⑫</sup>ゲーテの「真理愛」(Wahrheitsliebe)<sup>⑬</sup>は、美を承認するところの愛の「世界敬虔」によって、主観と客観との不離なる美しい促進的關係を見出すことにある。しかもこの美しい生きた関係こそは神性・イデーの機能であるが故に、神性に触れることが即ち生きた真理に触れることとなる。

科学と芸術とを所有する者は

Wer Wissenschaft und Kunst besitzt,

宗教をも持つ、

Der hat auch Religion;

前の二つを所有せざる者は

Wer jene beiden nicht besitzt,

宗教を持て。

Der habe Religion.<sup>②</sup>

ここにおいて、我々は彼の科学と芸術とが、深い宗教感情と密接に結びついていることを、はっきりと知ることができ。つまり、美を見るところとは神を感じるということであり、神を感じるということとは真を考えるということになる。彼の特質がある。彼にとっては、美と神と真は一体であり、この一体者こそがゲーテの言う生きたイデーなのである。従って、真が「実り豊かな認識」となるためには、「真理の意味」を啓くところの美と神の感情を尊重することこそが、必須の要件となるわけである。科学と芸術が、宗教を根底に抱きつつ、主観と客観との間に「美しい関係」を結ぶとき、そこに見出されるものこそは、人間を実り豊かに促進するところの「実り豊かな認識」に外ならない。

#### 四 主観と客観

ゲーテの精神機能の特質は、現実の諸対象を「享受と同時に認識すること」(zugleich zu genießen und zu erkennen)<sup>①</sup>、つまり、宗教的な愛の「世界敬虔」の感情のなかで、美を享受すると同時に真理を認識することであったが、このような精神機能は、美的で実り豊かな生きた統一的全体性を科学から期待するが故に、「科学を必然的に芸術と考

えざるを得ない」(Wir müssen uns die Wissenschaft notwendig als Kunst denken.)<sup>②</sup>といふことになったわけである。彼にとっては真理は生きたものでなければならぬ。「真なるものは促進する」(Das Wahre fördert.)<sup>③</sup>・「実り豊かなもののみが真である」という言葉からも明らかのように、人間を実り豊かに促進するものこそが真理なのであって、人間から切り離されたような死んだ理論は、おおよそ彼にとっては、真理の名に値しない存在といわなければならない。シラーとの値遇によって、カント哲学の影響を受けたゲーテは、『色彩論』(Farbenlehre)において、主観と客観との徹底的な分離、及びその高次元における両者の統一、ということをも物理学者に対して要求しているが、この要求の鋒先が対う窮極は、言を俟つまでもなく、美的な直観感情による主観と客観との統一にある。「客観と主観との触れ合うところに生がある」(Wo Objekt und Subjekt sich berühren, da ist Leben.)<sup>④</sup>のべあつて、「客観と主観との直接的合一」(unmittelbare Vereinigung von Objekt und Subjekt)<sup>⑤</sup>なくしては、生きた形態の「内的全生命」(inneres Gesamtleben)に触れることはできない。このようなわけで、彼は科学と芸術との結合によって、宗教的信仰感情を胸に抱きつつ、主観と客観との間に美しい実り豊かな促進的關係を見出そうとしたのである。では主観と客観とはどのような繋がりを持っているのであろうか。次の言葉からそれを明らかにしてみよう。

眼は自己の存在を光に負っている。無関心な動物的補助器官から、光は光と同じものに成るところの一つの器官を呼び出すのだ。すると眼は光に拠つて光のために自己を形成する。それは内なる光が外なる光を出迎えんがためである。

Das Auge hat sein Dasein dem Licht zu danken. Aus gleichgültigen tierischen Hilfsorganen ruft sich

das Licht ein Organ hervor, das seinesgleichen werde, und so bildet sich das Auge am Lichte fürs Licht, damit das innere Licht dem äußeren entgegentrete.<sup>⑧</sup>

ここに示されているように、客観と主観との間には、外なる「呼」の光と、それを出迎えんとする内なる「応」の光といった呼応関係が存在する。このような主観と客観との間の呼応対応関係の存在こそが、ゲーテにおける認識というものの成立根拠である。光と眼、音と耳とが分離し難く調和的の一体をなしているのと同様に、我々の精神も自然の諸力と不可分の有機的生命連関をなしている。つまり、自己(人間精神)と世界(存在一般)、器官(主観)と対象(客観)とは不可分の生命力で結ばれている。この故にこそ、我々にとっては認識というものが可能となるわけである。もっと明確な形で言えば、

もし眼が太陽のようでなければ、

どうして我々は光を見ることができよう。

Wär nicht das Auge sonnenhaft,

Wie könnten wir das Licht erblicken?<sup>⑨</sup>

というこの言葉によって表明されているように、ゲーテにとっては、古代ギリシアの哲学者エムペドクレスと同様、<sup>⑩</sup>「同じものは同じものによってのみ認識され得る」(Das Gleiche kann nur vom Gleichen erkannt werden.)のよう

る。主観と客観とのなかにはこのような同一物が存在する。しかも両者の内にあるこの同一物は、相互に「生産的要請」(produktive Forderung)<sup>⑩</sup>をし合うことによって、絶えず全体的統一を得ようと努めている。従って、この主観と客観とに別れて存在する同一物を、正しい対応関係に結び合わせるとき、そこに認識が成立することとなる。一八一五年二月十九日付のシュロッサー(C.H. Schloßer)に宛てた手紙にも、次のような言葉が記されている。

- ① 自然のなかには主観のなかにあるところのもののすべてが存在する。
- ② しかも何かそれ以上のものが。
- ③ 主観のなかには自然のなかにあるところのもののすべてが存在する。
- ④ しかも何かそれ以上のものが。
- a. In der Natur ist alles was im Subjekt ist.
- y. und etwas drüber.
- b. Im Subjekt ist alles was in der Natur ist.
- z. und etwas drüber.

更にこれに続いて「⑥は②を認識し得るが、④は③によって予感され得るだけである」(b kann a erkennen, aber y nur durch z geahndet werden.)<sup>⑪</sup>とある。①と②とからも明白なように、自然と主観とは同じ根本要素から成り立っている。「主観のなかには自然のなかにあるところのもののすべてが存在する」が故に、我々人間は自然を認識する

ことができるのである。いやそればかりか、「自然のなかには主観のなかにあるところのもののすべてが存在する」が故に、自然の鏡に自己を映し出すことによって、自然のなかに自己を再認識し、改めて自己の本質と課題を自覚するということも可能となる。主観と客観との同一要素による構成ということから、自然の認識、及び自己の本質と課題の自覚ということの可能性が開かれるわけであるが、しかし主観と客観とが完全に一つであるというわけではなく、互に「何かそれ以上のもの」を持っている。ここに認識の限界が生まれてくる。しかしそれは同時に、認識の「実り豊かさ」への出発でもあるということを忘れてはならない。自然のなかには、主観のなかにあるところのすべてのものよりも、「何かそれ以上のもの」が存在し、これによって自然はその物理的存在を超え出て、現象の内に「真理の意味」と価値を表現することになる。そして人間は、自然のなかにあるところのすべてのものよりも、「何かそれ以上のもの」によって、この「真理の意味」と価値を、つまりは真・イデーそのものを、自己のなかから予感的に直観し、認識の限界を無限の彼方へと押しやりながら、認識に「実り豊かさ」を与えるのである。予感というものは「内的真理感情」の発動であるが、この予感こそは、ゲートにとっては、水脈や金鉱を探るにも等しい思惟の占杖に外ならない。

我が全ての内面作用は生きた発見術たるの実を示す。この生きた発見術は、未知の予感された規則を承認的に外界において発見し、また外界へ導入しようとする。

Mein ganzes inneres Wirken erwies sich als eine lebendige Heuristik, welche, eine unbekannte geahnte<sup>⑤</sup> Regel anerkennend, solche in der Außenwelt zu finden und in die Außenwelt einzuführen trachtet.)



このような真を先取的に予感・予知する能力によって、未知なる規則が現実と化するのである。人間の「内的真理感情」の内に宿る「何かそれ以上のもの」は、自然の内に宿る「何かそれ以上のもの」と、直接的な認識を通して結び合うわけではないが、かえって間接的な予感による感応道交によって、「真理の意味」と価値を獲得する。いやそればかりか、両者の感応道交によって、認識そのものをも生動づけることになる。要するに、自然と人間、自我と世界とは直接的であれ間接的であれ、対応関係を持っている。このような両者の対応的調和関係によって、認識のみならず、意味と価値の世界が成立するわけである。従ってこの①②③④の結合こそがゲーテの希求するところであって、「至高の明澄裡にこれら四者を悉く包摂する存在を、古来すべての民族は神と名付けてきた」(Das Wesen, das in höchster Klarheit alle viere zusammenfaßt, haben alle Völker von jeher Gott genannt.)<sup>⑤</sup>ゲーテの「実り豊かな認識」が、神を根底において感じつつ、科学と芸術との結合を求めたのは、神こそがこの四者を悉く包摂するからに外ならない。道元は『正法眼蔵』の「現成公按」において、「仏道をならふといふは自己をならふ也。自己をならふといふは自己をわするゝなり。自己をわするゝといふは、萬法に證せらるゝなり。萬法に證せらるゝといふは、自己の身心をよび他己の身心をして脱落せしむるなり」という有名な言葉を遺しているが、まさにゲーテにおいても、自然の真理を認識するということは自己の本質を認識することであり、自己の本質を認識することは、雑穢の知見思量を截断して、自然の万象と感応道交することである。そしてここにおいてこそ、自己は存在の閃きに遇うことができる。「自然を認識するためには、人は自然自身であらねばならぬ」(Um die Natur zu erkennen, müßte er sie selbst sein.)<sup>⑥</sup>つまり、自己と方法との相即融合によってこそ、存在は自らを開示するのである。ゲーテの自然認

識は、このように自己と自然の万象とが感応相即し、自己が方法に証せられて行くが故に、自然を認識するということが、まさしく自己を認識することになる。「人間は世界を知る限りにおいてのみ自己自身を知るのであり、自己の内においてのみ世界を、世界の内においてのみ自己を識るのである」(Der Mensch kennt nur sich selbst, insofern er die Welt kennt, die er nur in sich und sich nur in ihr gewahr wird.)<sup>⑨</sup>とこの言葉が示しているように、ゲートにおいては、主観なき客観も、客観なき主観も共に空疎なものである。主観と客観とを分裂させ、自然の認識が人間との連関を持たないことほど無意味なものはない。既に見たように、人間と自然、主観と客観との間には対応関係があり、同じ律動的生命法則としてのイデーが貫流している。従って、卵内の雛鳥の「啐」と、卵外の親鳥の「啄」とが同時に作用し合うことによって、即ち「啐啄同時」によって新たな生命が産み出されると同様に、主観と客観とが、緊密な感応道交によって、正しい対応関係にまで有機的に醸熟することこそが、「実り豊かな認識」の大前提なのである。

## 五 自然認識

我々はこれまでの論述において、美が真を担うが故に、科学と芸術との結合の不可欠なることを見、また宗教を根底に持つ「内的真理感情」によって美が承認されるが故に、この「内的真理感情」こそが、「実り豊かな認識」の源泉となることを見た。そして主観と客観との間には未知の調和的対応関係があって、この対応関係を「美しい関係」にまで科学と芸術との共働によって醸熟させるならば、そこに見出されるものこそは、ゲートの求める「実り豊かな認識」に外ならない、ということを考察した。さてそれでは、ゲートはどのような段階を踏みながら、自然を実り豊

かに認識するのであろうか。

ゲーテにとっては自然は人間と同じ有機的生命体である。「有機体においては、すべての部分は一部分に、各々の一部分はすべての部分に作用する」(daß in einem organischen Körper alle Teile auf einen Teil hinwirken und jeder auf alle wieder seinen Einfluß ausübe)<sup>①</sup>のであるが、まことに自然こそは、部分と全体とが不可分の連関的交互作用の中に包括され、しかも「原像」(Urbild)と「転変性」(Versatilität)、「普遍的原型」(allgemeiner Typus)と「多様の可動性」(mannigfaltige Beweglichkeit)とが全体のなかに統一されているところの有機体に外ならない。「自然は生であり、未知なる中心から認識し得ない限界への連続である」(Natur ist Leben und Folge aus einem unekannten Zentrum, zu einer nicht erkennbaren Grenze.)<sup>②</sup>つまり、主観と客観とを包摂する万有全体の基礎に一つのイデーがあり、これに従って、「神は自然の内に、自然は神の内に」(Gott in der Natur, die Natur in Gott)永遠から永遠へと創造活動を続けている。そして「合一せるものを分裂せしめ、分裂せるものを合一せしむることこそ自然の生命である」(Das Geiente zu entzweien, das Entzweite zu einigen, ist das Leben der Natur.)<sup>④</sup>「形成されたものはすぐまた変形される」(Das Gebildete wird sogleich wieder umgebildet.)<sup>⑤</sup>というのが自然の生であり、多彩な姿を呈しつつ、収縮と拡張によって無限にメタモルフォーゼを繰り返すというのが自然の本質である。しかし「永遠なるものがすべてのなかに働き続けている」(Das Ewige regt sich fort in allen.)<sup>⑥</sup>なぜなら、この永遠なるものとしてのイデーがなければ、すべては無に帰してしまふからである。有機体のように、「すべての部分が合して完全なる全体を形成すべき場合には、何か特殊なものがあちこちに孤立することは許されな」(da, wo alles ein vollkommenes Ganze zusammen ausmachen soll, kann sich nicht hier und da etwas Spezifisches absondern.)<sup>⑦</sup>普

遍的全体のイデーによって特殊的部分が支配されているが故に、特殊の生こそは普遍の生の現われなのである。「生けるものは一つの一にあらず、それは恒に一つのものである」。一つの生きたイデーのメタモルフォーゼによる多相の表現、これこそが自然に外ならない。自然は極めて大きな自由を持って生動しているが、しかし決して根本法則としてのイデーから離れることはできない。現象がどれほど孤立的に見えようとも、そこには必ず永遠の生命法則が、イデーが脈打っている。たとえどんな特殊なものが現出しようとも、それはあくまでも、普遍のイデーの象徴的顕現に外ならない。ゲーテは、このような自然現象の多相において、有機的世界統一の永遠の生を見たのである。

さて、このような有機的自然に対して、彼はどのような認識方法をもって対処するのであろうか。彼は「生きた形態を如実に認識し、その外部の見えかつ捉えることのできる諸部分を連関において把握し、それらを内部を暗示するものとして取り上げ、かくして全体を直観においていわば支配せんとする衝動」(ein Trieb, die lebendigen Bildungen als solche zu erkennen, ihre äußern sichtbaren, greiflichen Teile im Zusammenhange zu erfassen, sie als Andeutungen des Innern aufzunehmen und so das Ganze in der Anschauung gewissermaßen zu beherrschen) <sup>⑧</sup>を持っている。この衝動こそは芸術衝動そのものであって、この芸術衝動をもって、彼は自然の認識へとたち向うのである。彼における「自然研究の真の道」(der wahre Weg der Naturforschung) <sup>⑨</sup>は、まず「観察の最も単純な継続」(der einfachste Fortgang der Beobachtung)に始まり、次この観察を「実験」(Versuch)にきび高め、そして実験から「妙果」(Résultat)を得ることによって終結する。従ってこれに呼応して、現象も次の三段階 <sup>⑩</sup>に発展する。

- ① 經驗的現象 (das empirische Phänomen)
- ② 科学的現象 (das wissenschaftliche Phänomen)
- ③ 純粹現象 (das reine Phänomen)

①の「經驗的現象」は、いかなる人も自然の内において認めることのできる感覺的・主觀的現象である。この經驗段階においては、「觀察の最も單純な継続」による共通現象の発見が中心となる。②の「科学的現象」は、①の「經驗的現象」を「実験」によって高めた客觀的な知的抽象的現象である。いわゆる科学の立場がここにある。しかしゲテはこの段階に停留することができない。自然という有機的生命体においては、常に形成と変形が繰り返され、しかも量的変化は同時に質的变化を惹き起すが故に、現象形態を単に比量的に抽象し、個々の対象を靜的要素に固定するだけでは、事物の本質を捉えたことにはならない。根本的には統一を保持しながらも、現象的にはより大きな多様性として現われる自然現象の本質は、単なる悟性概念によって認識されるものでも、また個々の經驗の集積から帰納され得るものでもない。つまり、悟性による經驗的事実の実験を通しての抽象化からは、「真理の意味」は生まれて来ない。科学的認識においては、悟性を判事とした定量的・因果律的決定論というものが本質的に不可欠ではあるが、しかし科学の把握する像が、定性面を排し、因果律的定量面にのみ自己を限定するならば、それはあくまでも世界像の一面にすぎない。この一面の真理をもって普遍の世界像とするところに、悟性万能的定量的科学の魔性が存在する。ゲテにとっては、世界というものは物理的法則を保持しながらも、決定的にはそのような法則というものに分解することの不可能な、もっとより大きな律動的生命法則に支えられた事物の流れである。かりに物理的法則に分解

することが可能であるとしても、実験器機の精密度の限界が同時に科学そのものの限界を暗示する。要するに科学が自己の出発点を、定性面を排し、定量的因果性のみに限定しようとするところに科学の限界があるのであって、現代の量子物理学が非因果的事件の導入を承認していることからみても、特に有機体においては、この非因果性ということに積極的意義がある。そこで生命現象の理解には、悟性による概念的整理と同時に、通約し得ないところの余りを、意味によって整理するということが、つまり、純粹で自然な深い感情を通しての理性直観によって、対象のなかに内在するところの③の「純粹現象」を捉えることが必要となる。認識が人間にとって実り豊かなものとなるためには、悟性による經驗的分析に加え、理性による理念的綜合がなければならない。經驗と實驗が「妙果」を生むためには、「内的真理感情」の内に育成された「予感された統一」(geahnete Einheit)<sup>⑩</sup>をもって、理性が直觀的に主觀と客觀との合一体としての「純粹現象」を把握する必要がある。なぜなら、この「純粹現象」の把握なしには、自然の眞の解明はもとより、自然と人間との実り豊かな交流というものも生まれて来ないからである。

ところで、ここで少しゲーテの言う理性と悟性の相違を明らかにしておかなければならない。

理性は生成しつつあるものを、悟性は生成したものを頼みとする。

Die Vernunft ist auf das Werden, der Verstand auf das Gewordene angewiesen.<sup>⑪</sup>

概念は經驗の総和であり、理念は經驗の妙果である。かの総和を得るには悟性が、この妙果を捉えるには理性が必要である。

Begriff ist Summe, Idee Resultat der Erfahrung; jene zu ziehen, wird Verstand, dieses zu erfassen, Vernunft erfordert.<sup>②</sup>

悟性というものは「生成したもの」を頼みとし、経験の総和(寄せ集め)としての概念を得る能力である。それは「真なるものを不真なるものから分割すること」(das Absondern des Echten vom Unechten)<sup>③</sup>を旨とするが、ゲーテが最も重視するところの流動機能のなかに存在する生きた真理を捉えることはできない。それに対して、理性というのは「生成しつつあるもの」を頼みとし、「形態によって現われる現存在を、生きた関係ある機能において洞見する」(Das Dasein, das sich durch die Gestalt hervorhut, in lebendiger, verhältnismäßiger Funktion erblicken)<sup>④</sup>能力である。つまり悟性は固定したカテゴリーに拠って経験内容を分析するのであるが、理性は常に「内的真理感情」を尊び、それと結合することによって、経験の総和としての「科学的現象」を、経験の妙果としての「純粹現象」にまで高め、概念を生命連関のなかへと移入する。ゲーテにおいては、理性と感情とが緊密な相関相映作用を営んでいるが故に、彼は理性を「不真なるものに対する自然的嫌悪感」(natürlicher Abscheu vor dem Unechten)<sup>⑤</sup>としても規定するわけで、従って理性においては、カテゴリー自身が実り豊かなものへの生成運動のなかにある。

要するに経験の総和としての悟性概念だけでは「実り豊かな認識」とはなり得ない。経験的事実の内に基礎を持ちつつ、経験の妙果としての純粹な理性理念を直観することこそが、認識の実り豊かさを担うのである。

経験は、まずすべての動物に共通なる部分を教え、そしてどの点でこれらの部分が相違しているかを教えなければ

ばならない。理念は全体を支配し、發生的方法によって普遍的形象を引き出さなければならない。

Die Erfahrung muß uns vorerst die Teile lehren, die allen Tieren gemein sind, und worin diese Teile verschieden sind. Die Idee muß über dem Ganzen walten und auf eine genetische Weise das allgemeine Bild abziehen.<sup>③</sup>

一切の理念的なものは、現実的なものから乖離するならば、結局は現実をも自己自身をも食い尽すものであるが故に、「理念は決して自由であってはならない」(Eine Idee darf nicht liberal sein.)<sup>④</sup>が、しかし「理念を懼れる者は、結局は概念をも持つに至らなう」(Wer sich vor der Idee scheut, hat auch zuletzt den Begriff nicht mehr.)<sup>⑤</sup>。従つて、自己を「最高理性」(die höchste Vernunft)<sup>⑥</sup>にまぎ芸術によつて高揚させ、絶えず現実の経験の場に立脚しつつ、「純粹現象」という「原形の普遍的イデー」(die allgemeine Idee eines Typus)<sup>⑦</sup>を把握するといふことこそが、ゲーテにとっては、認識の窮極目標となるわけである。

## 六 根源現象

芸術というものは、自然の内において何らかの内的外的障害のために、未発の段階にとどまっているものを、欠けたところのない完全な一個の現実へと導き出すことを、その本分とするものであるが、この「純粹現象」――「根源現象」(Urphänomen)こそは、芸術的慧眼を通しての純粹な理性直観と純粹感情との結合による実り豊かな「妙果」である。では、認識の窮極として直観に啓示されるところのこの「純粹現象」――「根源現象」というものをゲーテはど



のように規定しているのであろうか。(純粹現象と根源現象は同一、従つて今後は主に後者の術語を使用する)

我々が経験において認めるところのものは、たいてい、多少の注意をもつてすれば、一般的な經驗的標題の下に配置され得るような場合のみである。ところがこれらの場合はまた科学的標題の下に配属され得るのであるが、この科学的標題たるや、なお更に高きものを指示しているのである。そしてこの際には、現象のある不可欠の諸条件が我々により詳細に知悉されるようになる。この時以來というものは、すべてが次第により高次の規則と法則に順応するようになるが、この規則と法則は言葉と仮説によつて悟性に啓示されるのではなく、色々な現象を通して直観に啓示されるのである。我々はおかろ現象を根源現象と呼ぶ。その理由は、現象界にはそれより上に位置する何ものもないばかりか、それは次のことに全く都合のよいものであるからである。我々が前に一段一段と高昇して行つたと同じように、今度はそれから一段一段と下降して、日々の經驗の最もありふれた場合にまでも到達することができるからである。

Das, was wir in der Erfahrung gewahr werden, sind meistens nur Fälle, welche sich mit einiger Aufmerksamkeit unter allgemeine empirische Rubriken bringen lassen. Diese subordinieren sich abermals unter wissenschaftliche Rubriken, welche weiter hinaufdeuten, wobei uns gewisse unerlässliche Bedingungen des Erscheinenden näher bekannt werden. Von nun an fügt sich alles nach und nach unter höhere Regeln und Gesetze, die sich aber nicht durch Worte und Hypothesen dem Verstande, sondern gleichfalls durch Phänomene dem Anschauen offenbaren. Wir nennen sie Urphänomene, weil nichts in der

Erscheinung über ihnen liegt, sie aber dagegen völlig geeignet sind, daß man stufenweise, wie wir vorhin hinaufgestiegen, von ihnen herab bis zu dem gemeinsten Falle der täglichen Erfahrung niedersteigen kann.<sup>①</sup>

悟性ではなく、「現象を通して直観に啓示される」ところの高次の律動的生命法則としてのイデーの現われ、これが「根源現象」である。「悟性では自然に達し得ない。神性に触れるためには、人間は自己を最高理性にまで高めることができないならぬ。神性は物理的ならびに精神的根源現象の内に現われる。神性は根源現象の背後に潜んでいて、根源現象は神性から出発する」(Der Verstand reicht zu ihr nicht hinauf, der Mensch muß fähig sein, sich zur höchsten Vernunft erheben zu können, um an die Gottheit zu rühren, die sich in Urphänomenen, physischen wie sittlichen offenbaret, hinter denen sie sich hält und die von ihr ausgehen.)<sup>②</sup> つまり、神性・イデーから出発し、「イデーに接して立つ」(an der Idee stehen)<sup>③</sup>の「根源現象」である。主観と客観との触れ合いのなから直観に啓示されるところのこの「根源現象」こそは、存在を映す曇りなき鏡であり、真理の意味の開かれる場である。

## 根源現象

認識可能なものの窮極として理念的

認識されたものとして現実的

あらゆる場合を包含するが故に象徴的

あらゆる場合と同一的

## Urphänomen

ideal als das letzte Erkennbare,

real als erkannt,

symbolisch, weil es alle Fälle begreift,

identisch mit allen Fällen.<sup>④</sup>

ここに端的に表現されているように、「根源現象」というものは、心眼をもって直観にのみ与えられるものであるが故に理想的・理念的なのであるが、しかし、時には注意深い愛の感情を持った観察者の眼前に赤裸に示される現象でもあるが故に現実的なのである。しかもあらゆる場合がここに濃縮され、ここからあらゆるものが演繹されて行く、つまり、特殊形態をとりながら普通のイデーを啓示するが故に象徴的であり、種々の条件によってどれほど千様万態に変化しても、常に同じ「根源現象」であるが故に同一的なのである。つまりどれほど形を変えて現われようとも、結局においては「もとの単一に還元せしめられ得る」(auf ihre ursprüngliche Einfachheit zurückgeführt werden können)<sup>⑤</sup>ものである。

主観と客観とが合一し、主観の全精神諸力が集中されたところに見出される「根本経験」(Grunderfahrung)<sup>⑥</sup>の内容としての「根源現象」こそは、「実り豊かな神の息吹の結実」(die Frucht des Anwehens eines befruchtenden

göttlichen Odems)<sup>⑦</sup>であって、人間から融離した「科学的現象」に、再び人間との連関のなかで生命を与えるところのものである。そしてこの「根源現象」は、自然の生命を抹殺するところの単なる類表象としての普遍性をではなく、現実の特殊の内にある、特殊の生命を生かすところの普遍生命を象徴するものであるが故に、これこそはすべての認識の窮極目標点となる。ゲーテにおいては、現実の現象はあくまで重んぜられなければならない。現実の「経験的現象」を離れた本質というものは無意味である。なぜなら本質・イデーというのは、「根源現象」という形をとって、現実の特殊の内に自己を表現するからである。従って、彼にとっては、実験というものは、現実の概念的貧弱化を惹き起すためのものではなく、実り豊かな「根源現象」を得るための一段階でなければならない。自然は常に、あくまで、現実の特殊相において自己の本質を顕現しているものである。なぜなら、「存在」(Sein)は「仮象」(Schein)なしには「*Sein*」たり得ることができないからである。つまり、

自然には核もなければ

Natur hat weder Kern

殻もない、

Noch Schale,

自然は同時にすべてなのだ。

Alles ist sie mit einem Male.<sup>⑧</sup>

自然には内もなければ外もないのであって、内がそのまま外なのである。ただ自然という有機的生命体は、「一つの」としてではなく、メタモルフォーゼによって「一つの多」として現われるが、しかし現実の場において「根源現象」を直観した者には、とりもなおさず現象それ自身が生きた理論となる。要するにゲーテの「実り豊かな認識」と

は、「根源現象」を直観すること、つまり現実の生き生きとした特殊相において、主観と客観との間を貫流するところの「美しい関係」としての普遍生命を把握することであったのである。この「根源現象」は認識の限界を示すものではあるが、イデーと現象とを結びつけ、「真理の意味」を象徴的に無限に啓いてくれるものであるが故に、人間にとっては、この「根源現象」こそが「実り豊かさ」への始まりとなるのである。

## 七 普遍と特殊

さてそれでは、このような「根源現象」の概念がゲーテ美学のなかで、どのような役割を果しているのであろうか。ゲーテは「根源現象」を「理念的・現実的・象徴的・同一的」と表明したが、この中で一番重要なのは「象徴的」という言葉である。なぜなら、「理念的」なるものと「現実的」なるものとを「同一的」に結合するものこそが「象徴的」なるものだからである。ゲーテは

特殊が普遍を、夢や影としてではなく、探究すべからざるものの生きた瞬間的啓示として代表するところに真の象徴性がある。

Das ist die wahre Symbolik, wo das Besondere das Allgemeine repräsentiert, nicht als Traum und Schatten, sondern als lebendig- Augenblickliche Offenbarung des Unerforschlichen. <sup>①</sup>

という有名な言葉を表明しているが、まさに「根源現象」こそは、「特殊」(現実的)において「普遍」(理念的)を直観的に啓示するところの「象徴」に外ならない。ゲーテは「比喩」(アレゴリー)と「象徴」(ジューンボール)を定義して、次のように言っている。

比喩は現象を概念にかえ、概念を形姿にかえる。そして概念は形姿のなかで一定の限界を与えられる。だから捉えようとすれば完全に捉えられ、言い表わそうとすればただちに言い表わすことができる。

Die Allegorie verwandelt die Erscheinung in einen Begriff, den Begriff in ein Bild, doch so, daß der Begriff im Bilde immer noch begrenzt und vollständig zu halten und zu haben und an demselben auszusprechen sei.<sup>②</sup>

象徴は現象をイデーにかえ、イデーを形姿にかえる。イデーは形姿のなかで無限に活動し、捉えようとしても容易に捉えることができないし、たとえどんな言葉で言い表わそうとしても完全に言い表わすことができない。

Die Symbolik verwandelt die Erscheinung in Idee, die Idee in ein Bild, und so, daß die Idee im Bild immer unendlich wirksam und unerreichbar bleibt und, selbst in allen Sprachen ausgesprochen, doch unaussprechlich bleibe.<sup>③</sup>

これによって明白なように、「比喩」は「概念」と、「象徴」は「イデー」と結び合っている。概念は捉えることも言い

表わすこともできるが、イデーは捉えることも言い表わすことも容易ではない。つまり象徴というものは、「意味像」(Sinbild)のなかで「意味」(Sinn)と「像(形姿)」(Bild)が「*ein*」に「zusammenwerfen」(投合)される。しかも同時に、「像」のなかで思念された「意味」はその「像」をはるかに超えて行き、無限の世界へと飛翔するのである。

「象徴」(Symbol)の語源はギリシヤ語の「*σημειον*、*サイン*」(*symbolon*)であるが、これこそは「結合・一致・出遇い」を意味する言葉であって、その故に、ゲーテにとっては、象徴の象徴たるゆえんは、イデーと現象とを、普遍と特殊とを結び合わせることによって、そこに無限の意味を開示することにある。特殊が論理的な概念を代表するならば、それは「比喩」である。特殊が論理的概念を包摂しつつ計算を許さない普遍世界を代表するならば、それこそは、ゲーテの言う「根源現象」であり、「象徴」に外ならない。象徴は現実の今の一瞬において過去と未来を結合し、無限の「真理の意味」を現実の特殊の内において啓示する。従って「根源現象」を見る眼を持つ者にとっては、「現象するところのもの」はすべて象徴である。そしてそれは完全に自己を表現することによって残余のものを暗示する」(Alles was geschieht ist Symbol, und, indem es vollkommen sich selbst darstellt, deutet es auf das übrige.)<sup>④</sup>つまり、深い純粹感情と「最高理性」の直観を持つ者に対しては、普遍は特殊のなかに実り豊かな象徴的意味世界を開くことになる。

さて、特殊のなかに普遍を、現実のなかにイデーを啓示するのが「根源現象」であったが、実はこれこそがゲーテ美学の実践的基礎に外ならない。なぜなら芸術というものは特殊において普遍を象徴的に表現することを自己の本質とするからである。

詩人が普遍的なものに向いつつ特殊なものを求めるか、あるいは特殊なものの中に普遍的なものを見るかでは大きな違いがある。前のやりかたからは比喩が生じ、そこでは、特殊なものは普遍的なものの単なる実例ないし例証とされるに過ぎない。しかし、もともと後のやりかたが詩の本性なのである。詩というものは、普遍的なものを考えたり指示したりせず、特殊なものを語るのである。ところで、この特殊なものを生き生きとつかむ者は、同時に普遍的なものをも手にいれるのであり、しかも、それと気づくことなくそうしたり、さもないければ、後になってやっとそれと気づくことになるのである。

Es ist ein großer Unterschied, ob der Dichter zum Allgemeinen das Besondere sucht oder im Besondern das Allgemeine schaut. Aus jener Art entsteht Allegorie, wo das Besondere nur als Beispiel, als Exempel des Allgemeinen gilt; die letztere aber ist eigentlich die Natur der Poesie: sie spricht ein Besonderes aus, ohne ans Allgemeine zu denken oder darauf hinzuweisen. Wer nun dieses Besondere lebendig faßt, erhält zugleich das Allgemeine mit, ohne es gewahr zu werden, oder erst spät.<sup>⑨</sup>

芸術家(詩人)というものは、「鋭い愛に充ちた眼」(der scharfe, liebevolle Blick)<sup>⑧</sup>と、深い豊かな感情によって育まれた「生産的想像力」(produktive Imagination)・「生産的構想力」(produktive Einbildungskraft)を「持ちこたひ」は「精密な感性的ファンタジー」(eine exakte sinnliche Phantasie)を持つてゐる。この「精密な感性的ファンタジー」が、「理性と感性との間を媒介し、どんな特殊にも必ず普遍を付加するが故に、芸術家は自己の創造力に従つて、特殊を生き生きと描き続けさせすべし」といふ。



難しいのはよくわかっているが、特殊なものとの把握と描写が芸術の本来の生命でもあるのだ。それから、普遍的なものの内にとどまっている間は、誰もが我々を模倣することができる。けれども、特殊なものについて我々を模倣できる者はいない。なぜなら、ほかの者はそれを体験しなかつたからだ。それに、特殊なものには共鳴する者がなかうなど心配する必要はない。特性というものは、どんなに特異なものであっても普遍性を持ち、描かれるものは、石ころから人間に至るまで普遍性を持つのだ。すべては繰り返され、ただの一度しか存在しないようなものはこの世にはないからだ。

Ich weiß wohl, daß es schwer ist, aber die Auffassung und Darstellung des Besonderen ist auch das eigentliche Leben der Kunst. Und dann: solange man sich im Allgemeinen hält, kann es und jeder nachmachen; aber das Besondere macht uns niemand nach, warum? weil es die anderen nicht erlebt haben. Auch braucht man nicht zu fürchten, daß das Besondere keinen Anklang finde. Jeder Charakter, so eigentümlich er sein möge, und jedes Darzustellende, vom Stein herauf bis zum Menschen, hat Allgemeinheit; denn alles wiederholt sich, und es gibt kein Ding in der Welt, das nur ein Mal da wäre. ⑤

芸術はあくまでも特殊によって普遍の固定化を打ち破らなければならない。新たな普遍は特殊を生き生きと捉えることから生まれてくるのである。「特殊は永遠に普遍に従属する。しかしまた、普遍は永遠に特殊に依存しなければならぬ」(Das Besondere unterliegt ewig dem Allgemeinen; das Allgemeine hat ewig sich dem Besondern

zu fügen<sup>⑪</sup>。つまり、普遍というものは特殊においてこそ自己の生命を宿すのであり、また表出もするのであるから、特殊の生命を尊重し、特殊を生き生きと掴んで表出することが同時に普遍をも手に入れることになるのである。「特殊」の内に「普遍」を瞬間的に「象徴」するというのが「根源現象」であつたが、芸術こそはこの「根源現象」の機能というものを自己の実践的基礎としなければならない。

我々はゲーテの「実り豊かな認識」というものを考察し、この「実り豊かな認識」が「根源現象」の把握によって獲得されるのだということを、そしてこの「根源現象」の機能こそは、ゲーテ美学のみならず、すべての芸術の実践的基礎となるべきものであるということを見た。これをもってこの論を閉じることとする。

## 註

## 一

- ① MuR, 607. (マイヤー版による)
- ② MuR, 562.
- ③ MuR, 758.

## 二

- ① H.A. 13, 305.
- ② MuR, 619.
- ③ Faust I, 456f.
- ④ H.A. 1, 358.
- ⑤ H.A. 13, 31.
- ⑥ MuR, 800.

- ⑦ MuR., 413.
- ⑧ MuR., 719.
- ⑨ MuR., 1345.
- ⑩ MuR., 1346.
- ⑪ MuR., 1344.
- ⑫ G. Simmel : Goethe, Leipzig 1923, S. 64.
- ⑬ Biedermann : Goethes Gespräche II, Nr. 4072.
- ⑭ H.A. 12, 54.
- ⑮ MuR., 1193.
- ⑯ MuR., 468.

### III

- ① W.A. I, 47, 94.
- ② H.A. 12, 43.
- ③ Zu Eckermann, 18. Febr. 1829
- ④ Biedermann : Goethes Gespräche II, Nr. 2583.
- ⑤ MuR., 594.
- ⑥ MuR., 815.
- ⑦ J.A. 37, 226.
- ⑧ Farbenlehre, 102.
- ⑨ An Knebel, 10. Nov. 1831.
- ⑩ Faust I, 3456.
- ⑪ H.A. 1, 304.
- ⑫ H.A. 8, 313.

- ⑬ H.A. 2, 105.
- ⑭ H.A. 13, 244.
- ⑮ H.A. 8, 319.
- ⑯ MuR, 1151.
- ⑰ MuR, 1138.
- ⑱ MuR, 261.
- ⑲ MuR, 562.
- ⑳ H.A. 12, 9.
- ㉑ MuR, 633.
- ㉒ H.A. 12, 102.
- ㉓ MuR, 1379.
- ㉔ MuR, 1379.
- ㉕ MuR, 198.
- ㉖ MuR, 561.
- ㉗ MuR, 377.
- ㉘ H.A. 12, 50.
- ㉙ H.A. 1, 370.
- ㉚ MuR, 394.
- ㉛ MuR, 382.
- ㉜ H.A. 1, 367.

## ■

- ① H.A. 12, 11.
- ② H.A. 14, 41.

- ③ MuR., 596.
  - ④ Farbenlehre, 716.
  - ⑤ Zu G. Parthey, 28. August 1827
  - ⑥ An Schultz, 18. Sept. 1831
  - ⑦ H.A. 13, 26.
  - ⑧ H.A. 13, 323.
  - ⑨ H.A. 13, 324.
  - ⑩ Zu Eckermann, 11. März 1828
  - ⑪ Farbenlehre, 58.
  - ⑫ H.A. Briefe III, 304.
  - ⑬ MuR., 328.
  - ⑭ An C.H. Schlosser, 19. Febr. 1815
  - ⑮ Zu Riemer, 2. August 1807
  - ⑯ W.A. II, 11, 59.
- H
- ① J.A. 39, 163.
  - ② H.A. 13, 35.
  - ③ H.A. 13, 31.
  - ④ H.A. 13, 488.
  - ⑤ H.A. 13, 56.
  - ⑥ H.A. 1, 369.
  - ⑦ Farbenlehre, 666.
  - ⑧ H.A. 13, 55.

- ⑥ Mur., 1283.
- ⑦ H.A. 13, 25.
- ⑧ H.A. 13, 232.
- ⑨ Mur., 555.
- ⑩ Mur., 1135.
- ⑪ J.A. 40, 171.
- ⑫ H.A. 13, 243.
- ⑬ J.A. 40, 171.
- ⑭ H.A. 13, 172.
- ⑮ Mur., 216.
- ⑯ Mur., 128.
- ⑰ Zu Eckermann, 13. Febr. 1829
- ⑱ H.A. 13, 172.

ク

- ① Farbenlehre, 175.
- ② Zu Eckermann, 13. Febr. 1829
- ③ Farbenlehre, 741.
- ④ Mur., 1369.
- ⑤ Farbenlehre, 202.
- ⑥ Mur., 768.
- ⑦ Zu Eckermann, 18. April 1827
- ⑧ H.A. 1, 359.

†

- ① Mur., 314.
- ② Mur., 1112.
- ③ Mur., 1113.
- ④ An C. E. Schubarth, 2. April 1818
- ⑤ Mur., 279.
- ⑥ H.A. 2, 165.
- ⑦ H.A. 7, 309.
- ⑧ W.A. II, 6, 302.
- ⑨ J.A. 39, 374.
- ⑩ Zu Eckermann, 29. Oktober 1823
- ⑪ Mur., 199.